



6日の授業参観、5年生の教室で。子どもたちはグループになって、ばらばらになった漢字の部品を組み合わせ、どんな漢字ができるかをできるだけたくさん見つけようとしています。

考えが出尽くしたグループに声をかけてみました。

「『田』と『木』で、『果』ができるんじゃないの？」

その子は「それっていいんですか？」と担任の先生に尋ねました。先生は「いいんじゃないかなあ。」と答えたので、私が「でも、『果』は、『木』の縦画が突き抜けていますよ。」と言うと、「ああ、そうか。」と先生は困ってしまいました。

……迷わせてしまいました。



学習とは、迷い、悩むもの

その後、6年生の授業に向かいました。さらにレベルアップした内容を学習しています。「かたかなは、何の漢字から生まれたか」を予想しています。「止」からは「ト」が、「保」からは「ホ」が……など、かたかなは漢字の一部分を取って作られたものという見方をもって、子どもたちは次々と的確に答えています。

しかし、どうしても分からないものがあります。「介」です。「ル」？「へ」？ 頭を寄せ合って考えますが、自信がもてないようです。最後に担任の先生が答えを発表しました。

「『介』から生まれたかたかなは、『ケ』です。」

確かに、この漢字の中に「ケ」が隠れています。でも「介」は「ケ」とは読みません。疑念を抱いた私は、授業後、AIに尋ねてみました。



私：かたかなの「ケ」のもとになった漢字はなに？

AI：カタカナの「ケ」は、漢字の「計」から作られました。正確には、「計」という字の一部分(偏のかたち)を取って簡略化したものです。奈良時代ごろ、万葉仮名として「計(ケイ)」の音を表すために使われ、その一部がのちにカタカナの「ケ」になりました。

「なんですと？ さては担任の先生、間違えたか？ いや、よくAIも間違うらしい。もう少しつっこんで尋ねてみよう。」

私：「介」ではないのですか？

AI：ご指摘のとおりです。結論から言うと、カタカナの「ケ」は漢字の「介」がもとです。

「あ、あっさりと認めた。少し懲らしめてやろう。」

私：「計」はひらがなの「け」のもとになったのでは？

AI：はい、とても良いところに気づいています。結論はこうです：ひらがなの「け」は主に「計」がもとになっています。

このあと、AIのうんちくが続きますが、割愛します。

私も担任の先生もAIも、迷い、悩みながら学んでいます。

だから、子どもたちも安心して学習していけばよいのです。みんな誰もが一生勉強です。